

# プロティノスにおける「思考」(dianoia)の問題

西村 洋平

## 一・はじめに

プロティノスにおける「思考、思考的部」(διάνοια, διανοητικός)は魂固有の認識をなう部分であり、「推論的部」(λογιζόμενος, λογιστικός)とも呼ばれる。その理由のひとつとして、魂が時間とともに推移的であることが挙げられる<sup>(1)</sup>。また、プロティノスは、发声されたことばが魂のうちなることばの写しであるように、「魂自身は知性のことばである」(V 1 [10], 3, 8, *aὐτὴν {sc. ψυχὴν} λόγος νοῦ*)と述べる。魂のうちには、知性が永遠において直知する直知対象がある、「ことば」あるいは「形成原理」(λόγος)として展開されている。もちろん、知性自身が発出するのではない。魂のうちに「知性のことば」としてあるのは、以下でも触れるように痕跡や型どりである。魂はこれらを知性のように一挙に全体として (ὅπουν πάτα) みうふることはできないのであり、魂は知性と一線を劃される。

他方、魂を肉体から解放し、知性の観照さらには一者との合一へと向かうというモチーフがプロティノス哲学に一貫してあることをわれわれは知つていい。「この世界」(ἐνταῦθα) と呼ばれる

感性界から「かの地」(έκεῖ) ともいわれる知性界への飛躍の主体は、他ならぬわれわれの魂である。プロティノスが第四九論放「認識する存立と彼方のものについて」の前半部において、思考の自己知について論ずるとき、眞の「自己知としてかれの念頭にあるのは、知性の自己直知活動である。思考の自己知を探ることは、魂が知性となる可能性を問うことである。

プロティノスは魂の感覚的部分における自己知を棄却して思考の検討に着手するさい、論じかたについて特異な思索をめぐらせる。

「一方、自己知をこの部分（魂の思考的部）にみとめるならば——」といふのも、それを知性とわれわれは呼ぶのだから——われわれはそれがいかに上方の「知性」と異なるのかも究明せねばならない。他方、みとめないならば、議論を進め得かのもの「上方の知性」へと到達し、「自己」が「自己」自身「を知ること」とはいつたいなにか吟味せねばならないだろう。だが、もしこのばあいにも下方のもの「魂の思考的部」のうちに「自己知を」みとめるならば、自己自身を知ることにどのような差異があるのか吟味しなければならない。じつ

に、もしいかなる差異もなければ、このもの「魂の思考的部

分」がすでに「上方の」純然たる知性だということになつてしまふ。したがつて、魂のこの思考的部分は、それ自身も自己自身へと振り向くのか、あるいはそうではなく「上方と下方」それぞれに向いてうけ取る型どりの理解をえるのだろうか。そこで「思考的部は」いかに理解をえるのか、はじめに究明せねばならない。(2, 16-26)

自己知が上方の知性にあることは議論の前提である。そこで、かれは一般に「知性」とも称される魂の思考的部分を議論の俎上にのせる。選択肢は二つしかない。一方 (*μέν*)、思考的部分に自己知をみとめるか、他方 (*λέπτον*)、それを是認しないかである。プロティノスの立場が判然としないのは、思考的部の自己知を否認し知性の吟味へと赴くことを方針とする後者の道においても、あらためて思考の自己知を問い合わせる。<sup>(5)</sup> プロティノスは思考の自己知を端的に否定しない。むしろ、知性と思考の差異を問題視するのである。思考は外部の認識であり推論的ゆえ知性とは異なると自らアンチテーゼを定立しつつ、プロティノスは思考の分析を深化させる。以下、第四九論放における思考概念をくわしくみていきたい。

## 一、思考の理解

### 一一一・感覚から思考へ

精察の糸口として、まずプロティノスは思考がたんに外的対象にかかるだけではないことを示す。そこで、「人間(ソクラテス)

を見て、それについて認識する」という事例が分析される。

「感覚は人間を見てその型どりを思考にあたえた。思考はなにを言つのか。まだなにも言わない。思考はただ知るだけであり、立ち止まつてゐる。」(3, 1-3)

感覚についてプロティノスは第四九論放において詳述しないため、ここでは他の論放から補つて簡潔に説明しみたい。かれにとつて感覚とは、魂が肉体を道具として用いおこなう認識である。魂が魂だけで活動するならば、「自己自身のうちにあるものを「把握する」のであり、知性認識のみがある」(IV 4 [28], 23, 5-6, *τῶν ἐν αὐτῇ {sc. ἀντιληφεταὶ ή ψυχή}, καὶ μόνον νόησις*) という。本質において知性的で非物体である魂が可感的対象を知るために、物体を受容し、それを魂が認識しうる形相として変換できる「媒介」(IV 4 [28], 23, 26, *μέσοι*) が必要である。それが感覚能力を与へられた肉体、感覚器官である。「似たものによつて似たものを」という原則にのつとり、プロティノスは道具としての肉体が知るものにも知られるものにも似ることができるとする。感覚器官は外的対象を受動しうるかぎりで知られるものに似るのであり、受動したものを魂にとつて把握可能な形相として伝えるかぎりで魂に似るのである<sup>(6)</sup>。感覚器官は「受容可能なものであると同時に伝達可能なもの」(IV 4 [28], 23, 27-28, *δεκτικὸν ἄμα καὶ ἀπαγγελτικὸν*) だといつ。第四九論放において、プロティノスは感覚を思考にとつての「使者」(3, 45, *ἄγγελος*) と呼ぶ。

こうした感覺論の背後にあるのは、魂が直接、外的事物を受動するのではないという、プロティノスが強く主張するテーゼである。したがって、かれが注意を喚起するよう、正確には「感覺能力ではなく、感覺能力をもつものが感覺するのである」(I 1 [53], 6, 9-10, ἢ δύναμις δὲ ἢ αἰσθητικὴ οὐκ αἰσθῆσται, ἀλλὰ τὸ ἔχον τὴν δύναμιν)。つまり、魂そのものではなく、魂と肉体の「合成体」(συναυφότεροι)が感覺するのである。肉体を必ずともなうことが感覺の特徴である。こうした感覺論を前提としつつ、プロティノスは第四九論放において感覺による自己知をつぎのように否定する。

「(感覺は) 肉体の内部に生ずるものに気づくことであるが、そのばあいでも、それは自己自身の外部のものの把握である」(2, 4-5)

肉体内部に生ずるものとは、すでに形相としてとり込まれた可感的対象である。第九章において、プロティノスは感覺にも内的な形相認識があることを示唆し、それから「ひるがえつて最終的な、いやむしろ第一の形相べと」(9, 35-36, εἰς τὰ ἔσχατα ἀνάπταν εἴδη, μέλλον δὲ εἰς τὰ πρώτα) 目を向けることをうながす。しかし、感覺それ自体は自己自身の外部のものの把握にすぎず、この能力による自己知は否定される。

上掲の人間を見る例に戻るならば、目が受容した人間の姿は魂に「型どり」(τύπος)として伝えられる。この型どりは感覺が魂に伝える形相である。ところで、プロティノスはしばしば魂のう

ちに型どりはないと主張する。しかし、そのばあいに否定されることは、指輪で蜜蟬に刻印される印章と同じような意味での型どりである。<sup>(9)</sup> 印章の比喩をそのまま魂の認識にあてはめるならば、魂は蜜蟬のような受容体になってしまふ。プロティノスは型どりの否定をとおして、まさにこうした受動性の含意を排除する。

だが、プロティノスは印章の比喩が喚起する外からの受容というふくみを排しつつも、外的事物の把握の結果として生ずる表象を「型どり」と呼ぶ。この語は伝統的に認識をめぐる議論でよく引き合いに出されるが、プロティノスにおいては、事物そのものにそくしてとらえられた把握的表象に「型どり」という語を用いるストア派の影響が強い。蜜蟬に指輪の型がそのまま写されるように表象は外的対象をあらわす。「型どり」という表現は、外から型を受容する認識の様態を説明するほか、認識主体と対象の類似関係を伝える。そして、この対象との類似という意味で、プロティノスは「型どり」を用いる。もちろん、型どりは事物そのものではないことに留意しなければならない。かれはそれを対象の「影像」(ὕδαλμα)あるいは「影」(σκάλ)と呼ぶ(IV 6 [41], 1, 29-32)。こうした型どりを受容するのは感覺器官であり、それを魂が把握することによつて感覺は成立する。

さて、感覺が肉体をとおしてえた型どりをまえに、思考はまだ無言であり、たんにそれを「知るだけである」(3, 3, ἔγω μόνον)という。この思考のはたらきは、どのような認識なのか。この事態は、感覺が伝える「人間」という型どりが意味内容をともなつて理解されることだと考えられる。つまり、「人間が石とは異なる」と判断するのではないものの、石を見るときとは異なる内容

が人間を見るときに魂に知られているはずである。プロティノスがくわしく述べるのではないが、「知るだけである」とはそうした認識である<sup>(11)</sup>。

## 一一一・思考固有のはたらき

思考はこの型どりにたいしてさらにはたらきかける。「人間を見る」喻えのつづきを引用してみたい。

「もし自分自身に向かつて「これは誰か」と語りかけないならば〔思考はなにも言わない〕。もし以前にその人に逢つたことがあるならば、記憶をあわせ用いて「ソクラテスである」と言うであろう。さらにその姿を開展するのであれば、表象が与えたものを分割する。だが、もし「思考がソクラテスについて」善い人かどうかを言うならば、一方、感覚をとおして知つたことから語つしたことになるが、他方、それらについて語つたことを、すでに自分自身でもつてゐることになる。思考は自己自身のもとに善の基準をもつてゐるのだから。」(3, 3-9)

ソクラテスだと述べるにとも、善い人だと判断をくだすことと同じ型どりにたいする思考の活動である。しかし、一方の活動はじつさいに逢つたことによる記憶にもとづくが、他方、思考は善の基準を「自分自身のもとに」(*παρ' αὐτῇ*) 有し、ソクラテスについて語ることを「自分自身で」(*παρ' αὐτῆς*) もつてゐる。ここでプロティノスは、感覚をとおして獲得する型どりについて「いつ

いふ、語るいふ」(*λέγειν, ἐπεῖν*) の背後にある、対象について語る内容を「もつんじ」(*ἔχειν*) を際だたせている。魂は感覚的所与とは独立したものとして、語る内容を自らのうちに「すでに」(*τόπη*) 有する。どこから魂は善の基準を授かつたのかと問い合わせ、プロティノスはつぎのように答える。

「いや、「思考は」善のようなものであり、また知性が思考のうえに輝きを放ち、思考はそのようなもの〔善い人〕の感覚に向けて力を授かつたのである。というのも、これこそ魂の清らかな部分であり、〔思考の〕うえにおかれた、知性の痕跡をうけ取るのだから。」(3, 10-12)

思考が自分自身のもとに備える善は知性に由来する。この点で、思考がもつ善は以前に逢つたか否かの感覚的経験にもとづく記憶と異なる。知性からものは魂のうちなる形相あるいは規定原理 (*λόγοι*) である。<sup>(13)</sup> しばしば、魂のうちにはあらゆる形相があるといわれる。すべてをもつことは、魂がすべてを同時に観照し把握することを意味しない。ある箇所で、魂における知性認識の対象 (*νόημα*) は「気がつかれずに内部にある」(IV 3 [27], 30, 8, *ἐνδον* ὥν λαυθάνει) ふされる。また、徳について論ずる第一九論放で、プロティノスはつぎのように主張する。

「〔魂は〕それら〔観照の対象〕を有する。だが、それらは現実活動しているのではなく、光を与えることなく〔魂に〕内蔵されている。それに光があたり、そうして魂がそれら

の内在を知るためには、魂は光をあてるもの（知性）へと向かねばならない。また、魂は〔観照の対象〕そのものではなく型どりを有するのである。」(I 2 [19], 4, 21-23)

肉体からの浄化のうちに、魂が知性へと振り向き観照することを考察する文脈に上掲の箇所はある。魂がもつ觀ものは「現実活動しているのではない」(οὐκ ἐνεργοῦτα)が、魂のうちにある。これらは魂が知性から授かる「痕跡」であり「型どり」である。それが痕跡や型どりなのは、魂が知性の形相そのものを有するのではないからである。第一九論放と同様、第四九論放においても魂のうちにある知性の痕跡は「型どり」と呼ばれる(2, 9-10)。

思考の理解は、魂がすでに有する知性的形相を感覚によつて与えられた型どりに符合させることで成立する。プロティノスは思考がえる「理解」(2, 11, σύνεισις)について「〔思考が〕ちようど自らのうちに古くからある型どりに、たつた今やつてきた新しい型どりをあてはめて認識するよ」(2, 11-13)だと述べる。さらに、かれはそうした理解を「想起」(ἀναμνήσις)と呼ぶ。この想起は、「記憶をもちいてソクラテ斯だと語ることではない。自分のうちに古くからある型どりは「知性に由来する」(2, 9, ἐκ τοῦ νοῦ)型どりである。思考があてはめる形相は、感覺的所与でなくあらゆる経験に先行するかぎりで古くからある。思考は感覺と異なり、その固有の活動のために肉体を必要としない。理解のために必要なものを、魂は自らのうちに有するのである。

「思考が——少なくとも眞の魂のものである本来的な意味で

の思考が<sup>(16)</sup>——感覚に由來する型どりの判断をしつつ、すでに形相を觀るという点で、つまり一種の自己意識によつて觀てゐる<sup>(17)</sup>〔と〕いう点で肉体とともにある生きものとは區別されるのである}。(I 1 [53], 9, 18-21)

この第五三論放の叙述は、肉体と魂の合成体に属するものと、活動のために肉体を必要としない魂に固有なものをわける文脈にある。ここで思考が觀るといわれる形相は、第四九論放の表現を援用するならば思考自身のもとにある知性の型どりである。感覚に由來する型どりにたいして魂が自分自身のもとに有する形相をあてはめることは魂の内的活動である。というのも、このとき魂は自らのうちにある形相に向くからである。内に向く意味で自己意識といわれているように思われる。思考が「ソクラテ斯は善い人である」と判断するとき、プロティノスによれば思考は自己自身に向き、自らのうちにある善の型どりを觀てていることになる。このことは、具体的に「ソクラテ斯は善い人である」という判断が意味をともなつた「理解」(2, 11, σύνεισις)として思考のうちに生ずることだと解しうる。<sup>(18)</sup>問題は、思考がそうした理解をえるとき、知性のよくな自己知を実現しているのか否かである。

そこで、「なぜこの部分〔思考〕が知性で、感覺的部分から始まる他の部分が魂ということではないのか」(3, 12-14)とプロティノスはあらためて問う。かれは、知性と魂の差異を明確にしようとしている。

### III・転換点——われわれのもの——

プロティノスはその問い合わせたいして自問自答、あるいは「仮想の対話者」と議論を交わす。「魂は推論のうちになければならぬ」(3, 14) というのがひとつの回答である。またかれは、「外的なものの洞察、外的なものに忙殺されるいふ」(3, 17) が思考の特徴であり、自己に属するものを洞観する知性とは異なると述べる。だが、問答はつぎのような展開をみせる。

「しかし、もしひとが「この〔思考的部分〕」が別の力によつて自己に属するものを精察するのをなにがさまたげようか」と述べるならば、かれは思考的部分も推論的部分も探求せざり、純粹な知性をとらえているのである。「それでは、純粹な知性が魂のうちにあることをなにがさまたげようか。」

「なにもさまたげないとわれわれはいうだらう。」

「だが、それは魂に属するとそんにいうべきだらうか。」

「いや、われわれは知性が魂に属するとはいわないが、われわれのものだというだらう。知性は思考的部分とは異なり上方にあるが、それでもなおわれわれのものである。もつとも、われわれは〔知性を〕魂の部分に数えいれることはないのだが。」(3, 19-26)

純粹な知性は魂に属さないが、それでも魂のうちにあるといふ。それが魂の一部でないのは、魂の能力ではないからである。

感覚のように、つねに発動させらるゝことができる能力とは異なるものとの連関に言及するため、プロティノスは「魂のもの」ではなく「われわれのもの」(*ημέτερον*) という語を援用するように思われる。しかし、かれは「感覚がつねにわれわれのものであることは同意されているように思われる」(3, 40-41, *aὐσθητός μὲν ἀεὶ ημέτερον δοκεῖ συγκεχωρημένον*) とも述べる。いのばあい、「われわれのもの」は感覚能力が魂に属することをあらわすだらう。したがつて、「われわれのもの」はそれだけでなにか特別に限定された意味をなさないといえる。しかし、知性がわれわれのものであると述べることは、自己知を論ずる文脈で大きな意味をもつ。魂が有する知性との関係の表現として正確を期すため、プロティノスは「いや、〔知性は〕われわれのものであり、われわれのものでない」(3, 26-27, *ἢ ημέτερον καὶ οὐχ ημέτερον*) と訂正する。われわれは知性をあわせ用いふこともあれば、そうでないこともあるからだという。ここでの「あわせ用いるいふ」(*προσχρῆσθαι*) を説明して、プロティノスはつぎのように論ずる。

「あわせ用いるとはどういうことか。われわれ自身がかのもの〔知性〕となり、かのものとして語ることだらうか。いや、かのものにもどうくことである。じつさい、われわれは知性ではないのだから。では、われわれは〔知性に由来するものを〕最初にうけ取る推論的部分によつて、かのものにもどうづくのである。……われわれ自身は推論するものであり、思考のうちにある知性対象を知るのである。これがわれわれだから。」(3, 29-36)

るのだろうか。

#### 四・思考の自己知と知性

この箇所から明らかにように、「われわれ」は魂と異なる別のものではない。知性はわれわれのものだと述べるとき、プロティノスは思考的部が知性にもどづくことで構築される魂と知性の関係を示す。思考は「ソクラテスは善い人である」と理解するとき、思考は自らのうちにある形相をあわせ用いる。「あわせ」(προσ-) という接頭辞が付けられているのは、われわれが魂の思考的部分であることにくわえて、用いられる形相が知性によつて与えられるものだからである。<sup>(20)</sup> つまり、それは知性への依存をあらわすのである。知性にもどづくことは、知性であることとは異なる。だが、思考が理解をはたらかせるときにもどづく知性は、完全に思考とは別のものとして思考から離れてあるのではない。そのばあい、いかなる理解も不可能である。知性がわれわれのものであることは、思考をとおしてえる理解がわれわれのものとして成立することを保障する。

対比させられているのはもはや対象が外部か内部かではなく、知性と思考の認識形式である。思考は知性によつて与えられた形相を用い、外的対象の型<sup>(21)</sup>りにあてはめて展開するのである。「ソクラテスは善い人である」ということばによる認識は、その一例である。その思考のはたらきの根底に、「知性にもどづく」とプロティノスが呼ぶ知性との関係がある。

思考は感覚と知性のあいだにある。<sup>(22)</sup> すでに述べたように、プロティノスは感覚を「使者」と呼ぶ。それにたいして知性は「王」だといふ(3, 44-45)。ところが、知性にもどづくとき「われわれもまた王となむ」(4, 1) プロティノスはいう。思考と知性は重な

かれば、思考が知性にもどづく在りかたを一つ挙げる。ひとつは「ちようじ法」のように、われわれのうちに書きつけられた文字によつて」(4, 2-3) 知性とかかることである。この「文字」(γράμμα)は、われわれのうちにある知性の痕跡や型<sup>(23)</sup>りとさきの議論で呼ばれていた。しかし、思考は意識せずとも型<sup>(24)</sup>りを作用させることができ。さきに引用した第一九論放でいわれるよう、魂が不明瞭なものとしてもつ形相に光をあてるためには、魂は「輝かすもの（知性）くと向かねばならない」(I 2 [19], 4, 22-23, δει προσβαλεῖν τῷ φωτίζοντι)。プロティノスは、まさに思考が知性くと向いたレベル、すなわち「いわば、「思考が」それ（知性）に満たされたこと、あるいはまた「知性が」現前するのを観て認めうること」(4, 3-4)において思考の自己知を探求する。

「やして、われわれはそのような観ものによつて他のものを見学びることで自己自身を知るのだが、それはまた、そのような「観もの」を認識する力をまさにその力で学びとることによつてか、あるいはまた、かのものとなることによつて「自己自身を知る」である。<sup>(25)</sup> つまり自己自身を認識する者には二とおりある。一方の者は、魂の思考の本性を知る者であり、他方の者は、この者の上方にある。「上方の者は」知性となつて、知性にもどづくことで自己自身を認識する。(4, 4-10)

「そのような観ものによつて他のものを学びとる」と(τῷ ἄπειρῷ τοιούτῳ ὥπατῷ τὰ ἄλλα μάθεῖν)をどのように解するか問題である。まず、他のものとはなにか。自己知の文脈である以上、それは自己自身とまったく関係ないのでなく自己に属する。では、なにと比べて他だというのか。<sup>27)</sup>これも自己知の文脈上、認識する主体と別のものだと考えられる。「他のもの」とは、われわれのものだとされた魂の感覚的部分であろう。<sup>28)</sup>われわれは思考的部

分や感覚的部分に分かたれた多なる魂ではなく、全体としてひとつの魂である。そのなかで思考のみが、自己に向き他の部分も把握しうる。

いずれにせよ、主体にまで認識がおよばなければ自己認識は成立しない。そこでプロティノスは、「一」とおりの可能性を挙げる。そのひとつが、知性を観る力、すなわち「魂の思考の本性を」(τῆς διανοίας τῆς ψυχικῆς φύσις) 知ることである。「魂の」という限定が知性の自己知との差異を鮮明にする。もう一方が知性になることである。このばあい「もはや人間としてではなく、完全に他のものとなる」(4, 11-12)のである。こうした自己知と、魂が他の部分といつしょに自己をひいたる自己知には懸隔がある。プロティノスは「一つの自己知をつぎのように敷衍する。

「それでは、もし思考的部分が知性に由来し、知性の後につづく第一のものであり、知性の似像であり、自らのうちに、いわば書かれたものとしてすべてをもつ——じつに、書くもの、書いたものはかの地にある——と思考的部分がいうのであれば、このように自己を認識した者は、ここまで立ち止

まるのではないか。そしてわれわれは、別の力を用いることでも、今度は自己を認識している知性を観るのではないか。いや、かのものもまたわれわれのものであり、われわれはかのものに属するのだから、われわれがかのものを代わりに会得すること<sup>29)</sup>で、そのようにして知性とわれわれ自身を知ることではないか。そうであることは必然的である。」(4, 20-27)

魂は、自己自身の起源が知性にあり、知性とのあいだに別のが介在しないと知る。「知性の似像」(εἰκὼν νοῦ)とは、魂の知性にたいする依存を表現する。範型から切り離されでは、その写しは消えてしまうのである。<sup>30)</sup>第九章で、プロティノスは太陽と太陽から発する光を挙げて説明する。光が太陽のまわりにとどまるよう、魂も知性から発し知性に依存する。「書くもの」と「書かれたもの」という関係も、同様の事態をあらわす。知性が「書くもの」(ό γράφων)であるのは太陽が光を発しつづけるように、つねに思考に文字(形相)を与えていることを示す。この比喩における書かれたものは、「自分自身で身を守ることもできなければ、援護することもできない」(Platon, *Phaedrus*, 275E5) のではなく、つねに知性という守り手を擁する。さらに、知性が「書いたもの」(ό γράψας) でもあるのは、書かれたものにたいする先行性を表現するためであろう。太陽は、太陽のまわりにあるどの光にも先行し原因として存在する。われわれが自らのうちに古い型どりとしてとらえるのは、書き手そのものではなく書き手が残した痕跡である。書き手はそこにではなく、「かの地」(έκει) にいるのである。

「いのち」(μέχρι τούτων) が思考の自己知である。自らが知性に由来すると知る思考の自己知において、認識主体は認識対象と合致しない。対象には「それ自身よりもなにか優れたもの」(4, 18, τι βέλτιον αὐτῶν) がよくされる。また、思考は知性の「なにであるか」(τι ἐστιν) をといえるのではなく、「<sup>(33)</sup>このようなものであるか」(οἵον ἐστιν)、「これはたらきはどうのようなものか」(οἵα τὰ ἔργα αὐτοῦ) を認識するにともなる。かの地の知性にとって自己知は、自己自身を直知する「はたひや」(ἔργον) が、自己自身のなんであるか、すなわち「本質」(οὐσία) をなす活動である(6, 34-35)。知性の「なにであるか」の把握は、知性における真の自己直知を成し遂げるにとつてのみ可能である。

その実現は「別の力によつて」(ἄλλη διωράψει) はたされる。だが、この力はもはや魂の思考能力ではなく知性である。この自己知は、知性になることではたされる。思考に与えられた自己知と、知性の真の意味での自己知の区分はプロティノスが目指すところであった。さきの引用につづく第五章において、プロティノスは知性における自己知の論証を行うが、その後にも魂と知性の認識の違いに言及する。

「一方、魂は他のものに属するゆえに自己自身を知性認識するのであつたが、知性は、他方、それ自身であるゆえに、またそれ自身が「どのよつたものか」であり「なにであるか」であるゆえに、そして自己自身の本性に由來し、自己自身へと向いているゆえに知性認識するのであつた。」(6, 3-5)

思考が「他のものに属するゆえ」(απὸ ἄλλου) は自己を知るのは、思考が知性にもどづき「知性をとおして」(6, 21, διὰ νοῦ) 自己認識するからである。<sup>(35)</sup> 思考は自己を認識しうるが、その活動は知性に依存し、対象である自己自身も知性に依存すると知るに過ぎず、主体、対象、活動の一一致にはいたらない。他方、知性は直知活動によつて直知するものであると自己を知る。つまり「いかなる活動をしているのか」(直知活動) が知性そのものである。また、知性は自らが知性的存在であると知る。そして、この「知性的存在であること」が知性そのものである。知性は、「自己自身を観つつ、自已自身がその活動でもあつた」(6, 5-7)。知性においては、直知主体と直知対象が一致するのみならず、それらを一致させている直知活動が直知主体・対象と同一である。

思考は外を向くゆえに知性と異なるのではない。プロティノスの思考論が闡明したのは、思考が知性に属し依存するゆえに、知性の自己知とは異なる仕方で自らを知ることであつた。思考は知性ではないため、存在と認識が一体である直知活動を実現できない。しかし、思考は知性がどのような活動をするのか知ることができ。思考は自己自身の活動が知性のそれとは異なると知るのである。

## 五・思考の問題

周知のことごとく、自己知を論ずるにあたつてプロティノスが強く意識するのはセクストス・エンペイリコスの懷疑である。<sup>(37)</sup> それにれば、ある部分によつて残りの部分を知ることは自己知といえ

ない。だが、プロティノスは知性における部分の分割と他性をみとめない。知性は「その全体が全体によつて〔観る〕のであり、他の部分を別の部分によつて〔観る〕のではなし」(6, 7-8, *kai* ὅλος ὥλῳ {έώρα}, οὐ μέρει ἄλλο μέρος<sup>(38)</sup>)。かりに知性において真の自己知が実現されるにせよ、魂の自己知は主体と対象が一致しない不完全なものにとどまるのか。プロティノスの思考論は、こうした懷疑に応答するものだつたに相違ない。

プロティノスは探求において思考にも自己知があると主張する。知性にもとづくとき知性はわれわれのものであり、われわれの思考はそのように知性に依存しつつ自己を知ることができる。たしかに主体、対象、活動が同一であるほんとうの意味での自己知は第二の存立階層、知性のものである。それでも、思考は自らの存在と活動の根拠を知りうるのであり、それはある部分で残りの部分を知る認識ではない。思考が自己知を不完全にしか実現しえないという結論は、判断保留とはまったく逆のところへとわれわれをうながす。思考は自己へと向くことで、自らが由来する知性とその活動がどのようなものかを知る。思考は眞の自己知が知性においてあることを認める。これは懷疑を乗り越える可能性である。だが、思考は自らが知性でないことも知つてゐる。終極を知りつつも、その終極に到達していなきことを魂は認識しうる。はじめに触れた「かの地への上昇」というモチーフは、こうした思考の自己知にもとづくのである。

問題は、思考に見いだされたもうひとつの自己知、すなわち知性になることで実現する自己知である。プロティノスはどのようにその終極にいたるのかにも論及する。

「自己自身の他のものを放下し、この〔知性〕によつて知性を眺めるとき、そして自己自身で自己自身を〔眺める〕ときにこそ、そのものは知性となる。」(4, 29-30)

他のすべてを排除して残るのはすでに知性なのだろうか。プロティノスは、知性になることは完全に他なるものになることだと述べ、つぎのようにいふ。

「そして、魂のすぐれた部分だけを引き連れて、上方へと自己自身を運び去るのである。その部分だけが、知性認識のために翼をはやしうるのである。」(4, 12-14)

この部分は思考だといえる。上昇の主体は魂の思考的部分である。

「思つに、知性がいつたいなにか知ろうとする者は、魂を、それも魂のもつとも神的な部分をしつかりと観る必要がある。」(9, 1-2)

そのためには自分自身から肉体、感覚、欲求などをとり去らなければならない。そして、残つたものがその神的部分であり、「それをわれわれは、かの〔知性の〕光を保つてゐるのだから、知性の似像と呼んだのだった」(9, 7-8)とプロティノスは述べる。知性の似像とされたのは、思考に他ならない。肉体や感覚などの他

のすべてをとり扱うと、思考は知性になり自己直知に参入するのか。プロティノスは知性のうちに思考があると述べるとは決してない。ただ、それが知性になる可能性は明言する。その過程がどのようにあるかは「自分自身が必ず知性のうちに沈潜し、あるいは知性に活動をゆだねて」(8, 51-52) 語りつるにせよ、その主体として問題となりつけたのが思考である。

(4) プロティノスのテクストはオックスフォード版 (editio minor: *Plotini opera*, 3 volumes, edd. P. Henry et H.-R. Schwyzer, Oxford University Press, 1964-1982) をもとにいたのではない。しかし、各論攷の表題はプロティノス自身によつて冠せられたのではなく、ポルフュリオスが証言するように、弟子たちの間でもつともよく用いられていたものである。そうしたことから、*ὑπόστασις* の訳語として「存立」では三つの存立階層を示唆する「存立」を採用した。

### 【註】

- (1) プロティノスは「魂の生命や思考の継起的活動が時間である」。Cf. III 7 [45], 11, 20-62.
- (2) また、「思考はいよいよである」(V 3 [49], 6, 26) ところが箇所をめぐる ハーストウーム (H. Oosthout, *Modes of Knowledge and the Transcendental. An Introduction to Plotinus Ennead 5. 3* [49] with a Commentary and Translation, Amsterdam / Philadelphia: B. R. Grüner, 1991, pp. 113, 136-137) は十三(中二)編男「自己知——新プロトノス主義の論理学の射程——」「アルケー」第五章、関西哲学会年報、一九九七年、一六一—八頁)の解釈を参考。
- (3) いわゆる「存立」(*ὑπόστασις*) は、明らかに第四九論攷で中心的に扱われる「認識する存在」としての魂と知性、そして「認識の彼方にある」(V 3 [49], 12, 48, ἐπέκεινα γνώσεως) いわゆる「者を指す。むねん、つとに指摘されし「*ὑπόστασις*」という語がプロティノスにおいて魂・知性・二者の「階層をあらわす術語として定着して

がつて」(2, 23, τοίνυ) にせ、前文でやがてか分岐した問いを総括する幾能があれど読む。

- (6) Cf. IV 4 [28], 23, 29-32, 「シテ」(媒介となる第II)のものば} める認識の道具であり、知るものとも知られるものと  
も回一であるはやはなへ、やれぞれに似ぬことが備わつて  
しゆむのとある。外部のものに似るのは受動をとおしてで  
あり、内部のものに似ぬのは「道具の」受動様態が形相  
になむる。外部のものに似るのは受動をとおしてで  
γνώσεως τυπος οὕτε ταῦτον δεῖ τῷ γνώσκοντι εἴναι οὕτε τῷ  
γνωσθησομένῳ, ἐπιτήδειον δὲ ἑκατέρῳ ὅμοιωθῆναι, τῷ μὲν  
ἔξῳ διὰ τοῦ παθεῖν, τῷ δὲ εἴσω διὰ τὸ πάθος αὐτοῦ εἰδος  
γνεόσθαι).

- (7) プロティノスは第一論放「非物体的なものの非受動性に  
ついて」における問題にとつ組んでゐる。

- (8) 「成体ば、しむつづけ「生やもの」(ζῶν) と呼ばれる。第五三  
論放では、「{體}」はいだ様の肉体と體から成るべいた  
ふねむ光から生やものをなにか異なるものとして生み出  
す」(I 1 [53], 7, 3-5, ποιουόντς ἐκ τοῦ σώματος τοῦ τοιούτου  
καὶ τυος οἶου φωτὸς τοῦ παρ' αὐτὴν δοθέντος τὴν τοῦ ζῶου  
φύσιν ἔπερόν τι) である。

- (9) E.g. IV 7 [2], 6, 37-49; III 6 [26], 3, 27-35; IV 3 [27], 26,  
29-32; IV 6 [41], 1, 8-23.

- (10) E.g. Diogenes Laertius, *Vitae philosophorum*, pp. 472, 20-  
473, 6 (ed. M. Marcovich) = SVF II, 53 (ed. J. von Arnim);  
Sextus Empiricus, *Adversus mathematicos* VII, 227 ff. (ed.

H. Mutzschmann) = SVF II, 56. 後者の詔題に「わざ、ゼノ  
ハタケント」トレスは蠍蟻に残る印章のよつた「魂における  
刻印」(τύπωσις ἐν ψυχῇ) を表象としたが、それではつまから  
てしまふ刻まれる表象が記憶されたこと、あるは一度に  
二つの異なるものをひらべることの説明ができないとして、  
後のクリコシッポスは「変容」(ἐπεπόντις) と解釈しなおし  
たとい。もちろん、この解釈もプロティノスには受け入  
れがたるものだつたに違ひない。まだ、オーストカーム (H.  
Oosthout, *op. cit.* [n. 2], pp. 83-87) の比較研究も参照。

(11) ハダヤーは別の箇所 (III 8 [30], 6, 25-29) の解釈をとおし  
て、思考がもつ所与の把握のうちに対象と自己自身を識別  
する認識があれどある。このアキラカは「すでに形相を観  
ておつ」(I 1 [53], 9, 19-20, εἴδη ήδη θεωρεῖν)、知性的形相  
に感覚的表象をあてさせぬつてゐる。Cf. L. Lavaud, La  
diânoia médiateuse entre le sensible et l'intelligible, in:  
*Études platoniciennes* III. L'âme amphibia. Études sur  
l'âme selon Plotin, Paris: Les Belles Lettres, 2006, pp.  
32-40; 49.

(12) 感覚的表象にムダマヒシテ「ハクハチスにツヒテ」など  
と、知性から認識したものはムダマヒシテ「ハクハチスを

ハ」などを区別する中三(中三純男、前掲論文〔註1〕、一六  
頁)の解釈を参考にした。

(13) 魂くら展開された知性的形相を λόγοι と複数形で表現する  
。この術語についてセアコラヘ (L. Brisson, Logos et  
Logoi chez Plotin: leur nature et leur rôle, *Les Chaires*

*philosophiques de Strasbourg* 8, 1999, pp. 87-108) を参照。

(14) Cf. III 6 [26], 18, 24, 「魏は<sup>相</sup>存在の形相を有して居る」  
(ή μέν γε ψυχὴ τὰ τῶν ὄντων εἴδη ἔχουσα) ; IV 4 [28], 16,  
5-6, 「心 {體の} いだに<sup>相</sup>するにむ興<sup>おき</sup>居<sup>ゐ</sup>るの<sup>で</sup>だべ<sup>ア</sup>」  
「心の規定原理が回<sup>アハ</sup>に<sup>アハ</sup>居<sup>ゐ</sup>る」(ἐν αὐτῇ {sc. ψυχῇ} δὲ οὐδὲν  
παρεληλθός, ἀλλὰ πάντες οἱ λόγοι ἀμά) .

(15) Cf. IV 3 [27], 30, 7-16.

(16) ΙΙ [53], 9, 20-21, την γέ κυριως της ψυχης της ἀληθους διάνοιαν. Καὶ τὸν (Plotin. *Traité* 53 (*I*), Introduction,

traduction, commentaire et notes par G. Aubry, Paris:

Les Editions du Cert, 2004, p. 98, n. 40) は 知性に及ぶる  
「高次の魂」と誤解されながらも、*τὸν ἀληθικὸν καὶ ἀληθῆς* を「真正な  
魂」(l'âme véritable) ではなく「眞のハカラニの魂」(l'âme  
qui est dans le vrai) と呼んで提案する。たしかに、こ  
れの思考は知性に及ぶる魂ではない。だが、文脈からも  
*ἀληθής* から限定が肉体と交わらない魂を指すための形容  
であることは明ひかであり、誤解への憂慮は不要である。

(17) I 1 [53], 9, 20, συναποθήσει. 主要原本は σὺν αἰσθήσει である  
オーブリー (G. Aubry, *op. cit.* [n. 16], p. 98, n. 38) もこの読  
みを採用する。彼女は形相を観るとこゝ思考のせたひしが  
感覚と同時におるゝ解ある。しかし、それでは前文とあつた  
ゞ同じ内容を述べてゐるにあり、ラヴァード (L. Lavaud,  
art. cit. [n. 11], p. 38, n. 10) も指摘するように「ふねば」  
(οὐτοῦ) えゝう留保の説明がつかない。ここでは、直後に「魂  
は血肉自身に向き、自身のうちにあつて、すこしも搖

るがないのやおな」(I 1 [53], 9, 23-24, ἀτρεμῆσε οὐν οὐδὲν  
πάτον ἡψυχὴ πρὸς ἑαυτὴν καὶ εὖ ἑαυτὴ) ルーネれゆよひに、思考  
が自身に向かってゐるのをあらわすと解し、底本の読みを採用した (pace L. Lavaud)。この箇所については、山口  
(山口義久「プロティノスにおける心身合一体と魂の関係について——」『新プラトン主義研究』第四号、一〇〇五年、七六  
頁) の訳が参考になった。かりに「感覚とともに・同時に」(οὐν  
αὐθίστη) と読むにしても、思考活動のうちに形相を観る的なベクトルが存在することに変わりない。そこにプロティノ  
スは注意を喚起するのである。

(18)  
じっさい、なにも考えずに口だけで「ソクラテスは善い人である」と述べるばあい、思考は同じはたらきをしていないだろうし、いかなる理解も生じてないであろう。中川（中川純男、前掲論文「註二」、一七一八頁）は、ことば・命題による認識という思考にたいして、知性認識はそのことば・命題全体の一性をとらえるものだと解釈する。つまり、「思考の働きは知性の働きなくしては成立しえない」という。本稿も以下で論ずるように、プロティノスは思考がえる理解の背後に知性への依存があると考えている。

(19) プロティノス哲学における「われわれ」は複雑であり、形而上学的な意味をおびることもあれば、通常の一人称複数をあらわすこともある。現代の研究者はさまざまに解釈するが、ここでは縷説しない。近代以降の「自我」(ego)や「意識」(consciousness)の概念とむすびつける研究にたいして

ざ’キーベルカーム (H. Oosthout, *op. cit.* [n. 2], pp. 34-37) の批判的検証を参照。今だもこの無因た譯放は「われわれ」ざ’キーベルカーム (R. Chiaradonna, Plotino: il « noi » e il nous (*Enn.* V 3 [49], 8, 37-57), in: *Le moi et l'intérieurité*, édd. G. Aubry et Fr. Ildefonse, Paris: Vrin, 2008, pp. 281-286) も眞摺たる所なり、翻ふば凶別やれた実体たる流動的なものにさなへ (contra G. Aubry, *op. cit.* [n. 16])’ 魂の思考的部位である。

- (20) Cf. H. J. Blumenthal, Plotinus, *Enneads* V 3 [49], 3-4, *METHEXIS* 3, 1992 (reprinted in: *Soul and Intellect. Studies in Plotinus and Later Neoplatonism*, Hampshire: Variorum, 1993), p. 146; Plotin, *Traité 49* (V, 3), Introduction, traduction, commentaire et notes par B. Ham, Paris: Les Éditions du Cerf, 2000, p. 52, n. 24. もろいにπροσχρήθαι の接頭辞が意味をもつてゐる、たゞは「用ひねりし」を表現する用法も一般的である。しかし、προτέχεινを回り文脈で χρήθαι を使用する (3, 28)。しかし、προσχρήθαι は三行の「用ひし」程度も使われ、かれの接頭辞くのじだむつがいかがれ。
- (21) 3, 37-40, 「われわれは魂のその主要な部分、すなわち劣つたものと優れたもの二つの能力の中間である。劣つたものよりは感覚である、優れたものは知性である」(τοῦτο ὅντες {sc. ήμεις} τὸ κύριον τῆς ψυχῆς, μέσου δυνάμεως διπήσ, χείρους καὶ βελτίους, χείρους μὲν τῆς αἰσθήσεως, βελτίους δὲ τοῦ νοῦ).
- (22) もろいにπροσχρήθαι は「使節」(ἄγγελος) によるおどした意味としていたり、セラニ (P.-M. Morel, *La sensation, messagère de l'âme. Plotin, V, 3* [49], 3, in: *La connaissance de soi. Études sur le traité 49 de Plotin*, dir. M. Dixsaut, Paris: Vrin, 2002, pp. 209-227) の詳細な分析を参照。

(23) アレザ’「用ひたる」(4, 1, βασιλεύομεν) ある動詞に注目して、われわれが王(知性)と曰うべきおれはがされたが、知性と曰う活動をしたしハルニスをの動詞があらわしていふと解釈する。その根拠として、この章の注語は「われわれ」であり、このわれわれがつねに活動の観点でおらわれれるのを挙げてゐる(e. g. 4, 7-8, τὸ γνώσκοντα)。この「われわれ」が魂と別に指定され、「純粹主体」(sujet pur) であるのかは疑問であるが (pace B. Ham, *op. cit.* [n. 20], pp. 18; 122)’ プロティノスが「用ひたる」の想であるにふれわれわれが知性のよつたな認識をしつゝ可能性を表現するのではたしかである。しかし、亞レトドも確認する所である「{血脉}血脉を認識する者たるのゆの{知性}おもつ」(4, 10, ἐκεῖνοι {sc. νοῦ} γνόμενοι {sc. τὸ γνώσκοντα ἑαυτόν}) のである。

- (24) ルの長いヘントは、「一一一」思辨固有のはたみや」で触れた。ヒカルヘ (E. K. Emilsson, *Plotinus on Intellect*, Oxford University Press, 2007, p. 210) は「辯のものが書いたいねた文字」よりも上等が立法者(知性)と法に従う者(思考)として發展せられてくる。立法者は法を生み出す者であり、法の完全なる理解をもつ。他方、その法に従う者

は法を理解していなくても、たんに法が課せられていると  
知ることで法に従うことができる。つまり、魂は自らのうち  
にある形相を知性のように理解することなく用いることが  
できるというのである。

(28) の背景にあるのはセクストスの議論である。Cf. Sextus Empiricus, *Adv. math.* VII, 310-312.  
構文の二つの方は異なるが、 $\tau\alpha\ddot{\alpha}\lambda\alpha$  の解釈についてはホー

六行目は底本の *η kata* ではなく、オーストウート (H. Oosthout, *op. cit.* [n. 2], pp. 97-98) や堀江 (堀江聰、「自」) 意識と光——プロティノス第四九論攷の思索——」、『宗教への問い<sup>2</sup>「光」の読解』(坂口ふみ、小林康夫、西谷修、中沢新一編)、岩波書店、一〇〇〇年、一四六一一四七頁) にない、写本が伝える *η kai* を読む。

26

七行目の分詞節「あるいはまた、かのものとなることによつてである」(ἢ καὶ ἐκεῖνο γινόμενοι) を読むやいには、五行目の本文にかかる節「そのような観ものによつて他のものを学びとることだ」(τῷ <τῷ> τοισύτῳ ὥρατῷ τὰ ἄλλα μαθεῖν) を含めず、破格構文と解した。じつやこ、「田口」自身の他のものを放下し」(4, 29-30, τὰ ἄλλα ἀφεῖς ἑαυτὸν) 知性を眺めるとき知性になると、わるのであり、知性になつて実現する自己知に「他のものを学びむる」じとほないようと思われる。

第一章において、「自分自身と一緒にある他のものを認識したものが、自己自身も認識しないならば」(1, 10-11 μὴ κακέινου τοῦ νοησαντος τὰ ἄλλα τὰ σὺν αὐτῷ καὶ ἑαυτὲς νευονκότος)、眞の自己認識ではないといわれるのである。つまり、自らのある部分によつて残りの部分を認識するのでは、自己自身の全体を知ることはないのである。こうした議論

の背景におけるのはセクストスの議論である。Cf. Sextus Empiricus, *Adv. math.* VII, 310-312.

(28)

ストウ

4, 25-26, ἐκεῖνοι μεταλαβότες {sc. ἡμεῖς}. Ήν τὸ μεταλαμψάσεν  
をめぐり大きくわけて二つの解釈がある。ひとつは通常のプラ  
トニン主義の用法で「分有する、与る」と訳出するばよいであ  
る。もうひとつは、目的語が属格ではなく対格であることに  
注目し分有とは異なる意味をくむ訳である。もし分有すると  
解するならば、魂が知性とならずに知性的自己知を実現す  
るにふになる。しかし、知性にもふづくむ一方の思考の自  
己知とのよに異なるのか説明がつかない。こなではアム  
ンジが採る後者の読みとしたがった(B. Ham, *op. cit.* [n. 20],  
p. 55, n. 41; F. Fronterotta, *Traité* 49 (V, 3) Sur les hypostases  
qui connaissent et sur ce qui est au-delà, in: *Plotin, Traité* 45-  
50, dir. L. Brisson et J.-F. Pradeau, Paris: Flammarion, 2009,  
p. 366, n. 30)。アロティノスは文頭の「ふ々」(ἢ) にのみにて前  
文の撤回あるふは明確化をはかり、魂がもはや魂として知性  
を観るではなく知性として知性活動をえたと換わる。接頭  
辞μετα-には魂の「代わつに」知性となる、おなじは魂かの知  
性に「移行する」ふふーニアノスを読み込むことができる。  
オーストウーム(H. Oosthout, *op. cit.* [n. 2], p. 102, n. 1)が解  
釈する「交換可能になる」(becoming exchangeable with it)も  
魅力的であるが、アロティノスに用例がなふんじくわざ、そ

のあらわな自動詞的な用法がここに適用できるのか疑問がのる。

- (30) Cf. VI 4 [22], 10, 1-17. プロティノスがもたらす範型と似像の関係は、切つ離れてはならぬものではない。似像は、範型に依存するので存立するのである。

Cf. 9, 7-20. ハレハプロティノスが注意するように、光は太陽から発する別のも（空気、場所）のうちにあらが、魂は他のものの中に存在するのではなく、純粹であり「それ自身で見られる」(ἐφ' αὐτῆς ὥπαθε). ハルヒスは、魂の肉体にたいする独立性を示す。第四九論放において頻繁にもちいられる〈光〉の表現は、バイアーゲアルテス (W. Beierwaltes, Die Metaphysik des Lichtes in der Philosophie Plotins, *Zeitschrift für Philosophische Forschung* 15, 1961, SS. 334-362) や堀江（堀江聰、前掲論文〔註〕〔五〕）を参照。

- (32) 現在分語ハオリスト分詞の使い分けに注目するダントン (C. D'Ancona, Le rapport modèle-image dans la pensée de Plotin, in: *Miroir et savoir. La transmission d'un thème platonicien, des Alexandrins à la philosophie arabo-musulmane*, édd. D. De Smet, M. Sebti et G. De Callataj, Leuven University Press, 2008, p. 13, n. 26) の解釈が参考になつた。

- (33) 4, 18-20. ハの箇所についてハ堀江（堀江聰、前掲論文〔註〕〔五〕、一四八頁）の議論を参照。

- (34) キューンは知性にかんする他方の節における以下が目的節ではなく理由節であると指摘する。われに対応し

て、むか一方の魂をめぐつて語るべれどπι ἄλλου μηριαὶ νῷ。ハレハプロティノスは、それをしたがつて証明した。Cf. W. Kühn, Comment il ne faut pas expliquer la connaissance de soi-même (*Ennéade* V, 3 [49], 5. 1-17), in: dir. M. Dixsaut, *op. cit.* [n. 22], p. 238, n. 1. 知性に属するかわりで魂の自己知は完遂されるのであり、知性との関係は必要条件である。

(35) また別の箇所では、「知性につれての知は、知性をひねして生じる」(8, 42-43, τὴν γνῶσιν αὐτοῦ {sc. τοῦ νοῦ} δι' αὐτοῦ γίνεσθαι) ふるわれる。同章四五行田も参照。

(36) Cf. 5, 45-46, 「じつに、知性は直知活動によつて直知するのではなく、ハレヒスが知性自身であつた。また直知対象を直知するのであり、ハレヒスが知性自身であつた」(νοήσει γὰρ τῇ νοήσει, ὅπερ ἦν αὐτός, καὶ νοήσει τῷ νοητῷ, ὅπερ ἦν αὐτός).

(37) 懐疑論にたゞあらハプロティノスの立場についてはオマーリー (D. O'Meara, *Scepticisme et ineffabilité chez Plotin*, in: dir. M. Dixsaut, *op. cit.* [n. 22], pp. 91-103) が田中（田中龍山「プロトヤヘスの懷疑主義」『新プロトヘス主義研究』第六回、1100九年、八五一九八頁）を参照。キューン (W. Kühn, art. cit. [n. 34], pp. 229-266) は第四九論放第五章において、ヤクストスの懷疑から抜け出ようとする仮想の対話者を批判しつつ、プロティノス自身がいかにセクストスの懷疑を乗り越えるのか詳細に分析していく。キューンによれば、プロティノスにとって自己知の成立は、知そのものの可能性を確立するものとであった。キューンは同

論文を発展させ研究書を出したが (W. Kühn, *Quel savoir après le scepticisme? Plotin et ses prédecesseur sur la connaissance de soi*, Paris: Vrin, 2009)’ ぐ回せ検証され  
たかへた。

(38) ノの一箇の構文のムカシタガ’ ゲベハの分類 (J. Pépin, Porphyre et Plotin. Sur le tout et les parties dans la connaissance de l'Intellect, in: dir. M. Dixsaut, *op. cit.* [n. 22], pp. 272-276) が参考になった。